たそがれ百景　十八

日高　聰子

ある人やうやう念願の定年迎へてやれ嬉し、この先二三年はまづまづかつがつ骨休め、これまで激務なりしかば氣ままに溫泉など巡りてとのんびり過ぐしたるに、いかなるにかこの頃は女房の眉間に皺寄り、煮物鉢置く手つきも荒々しく臺所にて聞こえよかしのため息、どこぞ具合の惡きにやと案ずればいとど目尻吊り上げ、具合の惡きかとはよく聞けたもの時間は有り餘るほどあるらむものを、茶の一杯も淹れず庭の草繁り放題に任せ尻を掻き掻き寝大佛ポーズに長々伸びて、それだに暑苦しさこの上なきを朝から晩まで大音量のテレビ三昧、ひつきりなしの雜音騷音大豪邸にもあらぬ庶民が家の內は壁も薄く全て筒拔けなれば、こなたは氣が散り續けもはや狂ひ出だす寸前なり、また強ひて出でむと用事作ればどこ行くどこ行く俺も行くと幼な子同然に慕ふも鬱陶し、かかる生活のはや一年にもなりぬるをみづからは如何に思ふぞ、體動かしもせず人にも會はずてテレビを唯一の友とすらむ毎日この先果てなく續けなばやがて認知症といふものになりもこそすれ、他人を引き合ひにするは憚りあれどこの處姿見えぬ裏の家のあるじ、昨日スーパーにて人の言ふを聞けば半年前より度々道に迷ひ譯分からずなりて、家人も怪しがり醫者に見するに計らずもその認知症となむ診斷されたるなる、さばかりのエリートすら避けられぬ腦の病まして我らが如き凡人は、餘程氣を附け日頃腦に良きことせずはまさに坂まろび落ちゆく玉と同じ、今更働けとは言はねど趣味なり旅行なり何ぞ好きなこと見つけて思ふ存分打ち込みたまへ、あたら人生の殘り時間を早々と隱居らしく老け込むは勿體無しやと息も繼がずに、エプロンの腰へ手を當てテレビの前に仁王立ちなればこなたも澁々起き上がり、一家のあるじに何事言ふぞと叱り飛ばすべきところながらこの月頃の我が有り樣思ひ返すに強くもえ言ひかへさず、さもやなりなむと思ひ當たるふしぶしもあればただ默然と胡座かき項垂れてぞ聞き居たりける。

　さて後は買ひ物やら體操やら外出より戻るごとにこれ如何にとカルチャーセンター公民館のパンフレットどさりと渡し、趣味の教室一邊行きて見よかしまづは見學だにと五秒に一度は勸むる煩はしさ、少しはさることもこそと思ひなりぬる我が心も女房の說教に負けたる形は癪なれば、エエ煩き奴いまだおつむは健常なれば汝の世話にはならぬはと箸放り投げサンダル突つ掛け出でてゆく、勢ひそのままに公園邊りまでは脇目も振らず來たれども、我に返れば普段の下着姿に金もなし、あな憂や冷やし中華食べ終へてぞ出づべかりしものをと齒裏の胡麻嚙みしめ悔やみても後の祭り、所在なくベンチに腰を下ろして眺むれば、日の高き眞晝どき砂場に遊ぶは母子一組と祖母らしき老女ばかり、それさへやがてご飯やご飯やと遊具片附け歸りてゆく、嗚呼孤獨、企業戰士と呼ばれこの數十年我が樂しみなんど二の次三の次にて徹夜重ね、休日返上し身を粉にして働きし果てや此れ、少し骨休めせむとうち思ひしばかりの自墮落を、認知症認知症と女の淺知恵テレビの受け賣りひけらかし責め立つるも思ひ返すだに腹立たし、人の認知症よりおのが肥滿を大事と思へかし年々肥へまさるをやと心の內に毒づきながら、またの日より心機一轉職安通ひを始めたり。

　さるは定年より一年あまりさしたるブランクとも覺えず、經驗も豐富なれば再就職は安かるべしと條件絞りて探すに、まづ年齡の壁に阻まれ面接にもたどり著かず、昨今の不景氣にて若き人すら職求め一つの求人に殺到すと相談員の話に見渡せば、成る程檢索の端末に長き列なしたる老いも若きも各々あさましきまで數多かかりけるを、さていかにせましとやすらふ程に、シルバー人材センターといふもの職安より遠からぬ建物にありと聞き、ま

づは如何なる所ぞと説明會をさし覗くにこれまた驚くばかりの人人人、中には五十路ばかりの年代もちらほら見えて、世に仕事求むる人のかくまで多く溢れけるかと今更ながら不景氣身に染みて覺ゆる上に、説明會の話聞きもてゆけば仕事の内容も量もてんで満足ゆかぬを忽ち興味意欲失せ末まで聞かで滑り抜けつ。

　さはれ不發ながらも兎に角アクションは起こしつれば口煩き女房も少しは默るべしと涼しき心地して階段下りるほど、とある階にて人々の笑ひ聲どっとはなやかに聞こえくるを何氣なう見遣れば、エプロン姿の男ども十五六人ばかり頭には白き三角巾巻き、調理臺を圍みて白衣姿の女性の話に熱心に聞き入る樣何やら家庭科の調理實習を彷彿さするも傍らの案内板見て納得、男の料理教室とあり。

　近年かかる教室の巷に流行り通ふ人少なからずと話には聞けども見るはこれが初めて、オープンスペースなれば心安く壁際に寄りて見るに、口々樂しげに笑ひさざめき老眼鏡かけ直して小麥粉計る二人組あり、淺鍋深鍋いづれをか用ふべきと手にとり持ちて見比ぶるもあり、つばらに見れば講師を除き還暦より若き人はあらざるべし、家にてはお爺ちゃんお爺ちゃんと扱はるべき人々の俄に生き生きとをち返りたる生徒ぶり、微笑ましくも羨ましくも時を忘れて見る程に、香の芳ばしきの漂ひ來るはパン焼き上がる香りかや、オーブン周りわらわらと取り圍み講師の後ろより顔さし出だして焼け具合神妙にうちまもる樣も初々し、やがて試食タイムとなるめれば見學遠慮すべしと立ちのくに、暫し暫しと講師の女性手を擧げ寄り來てこれよろしからばご覽ぜよとてチラシ一枚、ただ今生徒募集中の文字大きに見ゆ。

　かかる所に行き會ひしも何ぞの縁か、男子廚房に入らずを守り來たれどこの平成の世に味噌汁一つえこさへぬ男もをさをさあらじを、また古女房の機嫌損ねては飯抜きの憂き目必定も馬鹿馬鹿し、六十の手習ひちふ言葉もあればまづは試しに米の研ぎやう卵の茹で方習ふべいとその氣になりては矢も盾もたまらず、定員埋まらぬ先にとチラシ片手に受話器取り上げ翌週の入會約してけり。

　さ言ひつつもいざとなりては心臆して、かかるど素人のうちつけに交じらば人々の迷惑笑ひ者に必ずなりぬべきものゆゑに、金拂ひて屈辱味はむもあぢきなのわざやと足引き返すべく思へども、包丁といふ物初めて握りおつかなびつくり玉ネギ刻みながら、涙目辛しと顔見合はせて隣の人とはそれより話も彈みつつ、試食タイムも思ひの外樂しかりけり。

濡れ落ち葉　粗大ゴミぞと　箒もて　掃き出だされて　集ふ顔ぶれ

鹽せうゆ　味の決め手は　さしすせそ　講師の言葉　メモつて歸る